

## 《研究ノート》

「感傷的異性愛<sup>1)</sup>か、女性同士の連帯か—  
サラ・ハートの短編集『南部の形見』」

種子田 香

ヘンリー・ルイス・メンケン (Henry Louis Mencken, 1880-1965) はアメリカ南部を辛辣に批評し続けたジャーナリストであり、ヴィクトリア朝時代のお上品な伝統が残る南部を「文化のサハラ砂漠」、芸術や文化が根付かない土壌であると言いつつ知られている<sup>2)</sup>。しかし、彼の妻サラ・ハート (Sara Haardt, 1898-1935) はアメリカ南部アラバマ州の出身であり、彼はサラを初めて見た時から特別な感情を抱いていた。病弱な彼女の余命が長くないことが分かると、彼女の死が避けられないとわかっているにもかかわらず求婚し、作家を目指していた彼女のためにできる限りの支援を行って作品を世に出した。本稿では、メンケンとサラの往復書簡やサラの短編集『南部の形見』(Southern Souvenirs, 1999)を通して、この夫婦が歩んだ創作活動の軌跡をたどりつつ、サラ・ハートがメンケンの妻であることは、彼女の創作にどのような影響を与えたのか、南部嫌いで知られたメンケンの意外な一面と共に、考察したい。

サラとメンケンが初めて出会ったのは、1923年にメンケンが「文筆業」(“The Trade of Letters”)という講演を行うためにボルティモアにあるガウチャー大学に招かれた時である。サラはガウチャー大学の卒業生で、母校の英文科に勤めていた。多くの聴衆の中で、「椿のような白い顔に、陰のある黒い瞳」をしたサラに目が留まり、その場で用意していた原稿を投げ捨てて、講演の題名を「どうやって夫を捕まえるか」(“How to Catch a Husband”)へ突然変えたと、『南部の形見』の序章で、アン・ヘンリーが脚色を交えて描いている。その講演が終わるや否や、メンケンはガウチャー大学の知り合いに、前列に座っていたサラについて問い合わせ、2人は交際を始めるようになった。メンケンは40歳を過ぎており、ずんぐりした体格、率直な物言い、服装には無頓着で、一方、サラは25歳になるかどうかの若さで、控えめな性格、服装にも気を配るほうであった。一見、不釣り合いなこの2人は、長い交際を経て1930年に結婚に至ることになる。

サラは私立大学に進学できたとはいえ、それほど裕福な暮らし向きではなかった。高校を卒業するときに父親が亡くなり、家計を助けるために働き続け、そのために体力が落ち、ついに結核に感染した。メンケンとの結婚生活は5年という短い期間にすぎなかったが、サラの死が二人を分かちまで創作活動を通して公私ともにパートナーとなった。メンケンのアドバイスによって、サラは小説の創作や出版で注目を浴びるようになり、作家になりたいという彼女の夢は夫の支援によって現実のものとなったのである。

一方、文筆家として脚光を浴びていたメンケンは1920年代に精力的な活動をしており、テレビや新聞、雑誌など、メディアを通して強い発信力を持っていた。また、彼は進化論を始めとして、新しい価値観を受け入れにくい土壌のアメリカ南部をことあるごとに酷評していた。しかしながら、サラはアラバマ州の出身であり、南部の女性であった。彼の南部に対する辛辣なコメントと、妻に対する愛情深い態度には大きな祖語があるように思われるが、このギャップは何を表しているのだろうか。まずは、『南部の形見』の「エレン・グラスゴーと南部」(“Ellen Glasgow and the South”)から、サラの南部の同胞に対する思いを見てみたい。

ヴァージニア州出身のグラスゴーは、サラとアメリカ南北戦争の歴史認識が共通していて、同胞として心

を許していた。先輩作家であるグラスゴーに敬意の念を抱いていたため、彼女と同じジャンルで創作活動を行っている。つまり、恋愛小説でありながらも、性的な表現はお上品な伝統から大きくはみ出さない程度にとどめ、全体としては南部の伝統が消え去りつつあることを感傷的に映し出している。また、サラはヴァージニア州リッチモンドのグラスゴーの自宅を訪れ、小説を書く理由について尋ねている。

The truth is that Ellen Glasgow views all women as inevitably oppressed and inevitably tragic, especially those half-legendary gentle women of the Victorian era, and because sympathy for the oppressed has always been her most elemental feeling, she divines them the more plainly. "I should have pitied them," she sighs in her tenderest voice, "if for no other reason than that they have had to wait for so long. The Victorian era, above all, was one of waiting, as hell is an eternity of waiting. Women waiting for the first words of love from their lovers. Women waiting, with all the inherited belief in the omnipotence of love, for the birth of their sons, their husbands from First Manassas, Gettysburg, the Wilderness. Women waiting beside the beds of the sick and dying--waiting--. As a result, I think it is almost impossible to overestimate the part that religion, in one form or another, has played in the lives of Southern women. Nothing else could have kept them in their place for so many generations: it is the only power that could have made them accept with meekness the wing of the chicken and the double standard of morals." (269)

(拙訳)

エレン・グラスゴーはすべての女性は抑圧され、悲劇的であることから逃れられず、特に半分伝説のようになったヴィクトリア時代のお上品な女性たちは抑圧から逃れることができないと考えていることは本当である。抑圧されたものに対する共感グラスゴーにとって最も基本的な感情であるので、グラスゴーは抑圧された者たちを簡単に見抜く。彼女は優しい声でため息混じりに言った。「もし彼女たちがそんなにも長い間、待たされていたのなら、私は(もっと早くに)彼女たちを気に留めるべきだったでしょう。とりわけ、ヴィクトリア朝時代は待つことを求められる時代でした。永遠に待つ時代でした。女性たちは恋人から初めての愛の言葉を待ちました。女性たちは愛がすべてだということを代々信じさせられ、息子を出産するのを待ちました。女性たちは南北戦争中には息子たちの消息や、夫がマナッサスやゲッティスバーグの戦い、荒野から帰ってくるのを待ちました。女性たちは病人や死にかかっている人たちの傍らで待ちました。結果として、宗教が南部の女性たちの生活に果たした役割はとても大きいのです。他の何も彼女たちを何世代にもわたってそういった場所に閉じ込めておくことはできなかったでしょう。宗教だけが彼女たちに、飛べない鳥の翼や貞節の二重基準を従順に受け入れさせることができたのです。」



図1 リッチモンドのグラスゴー生家

グラスゴーはバイブルベルトと呼ばれるアメリカ南部のキリスト教信仰が熱心な地域は、新しい価値観を受け入れることが難しく、古い社会制度が温存されやすいと考えていた。そのために女性たちはいつまでも抑圧され続けていると彼女は指摘しているが、この発言は当時としては非常に勇気のいるものであった。グラスゴーのような上流階級出身の白人女性にとって教会を批判することは、自らが育ってきた価値観を全否定することで、両親や親戚、また大学や出版業界といったアメリカ南部で権力を持つものすべてに対して反旗を翻すことを意味した。

このような先輩作家の勇気ある言動に深い敬意を払いつつも、サラは南部社会を改革することを危惧しており、グラスゴーよりも保守的であったことがわかる。彼女は南部が近代産業化によって「標準化や大量生産のアメリカ的なパターン」“American pattern of standardization and mass production (274)”を受け入れ、地域の特色や築いてきた伝統を失ってしまうと危惧している。サラはグラスゴーの小説の愛読者であり、恋愛を基軸としながらも運命論的な哲学を背景に持つ小説スタイルを踏襲しているが、グラスゴーほどには南部の制度に対して憤りを作品に表明していない。サラが南部の家父長制に対してそれほど批判しなかったことは、*Mencken and Sara* の序章で Marion Elizabeth Rodgers が「メンケンの伝統の破壊とサラ自身のセンチメンタルな気持ちの間で葛藤があった」(49) と指摘しているように、メンケンとの恋愛と結婚が影響していると思われる。サラとメンケンの結婚までの道のりを見てみたい。

1925年にはメンケンがサラのエッセイ“Alabama”をメンケンが編集をしていた *The American Mercury* で出版した。また短編小説“All in the Family”は *Century Magazine* が購入した。しかし、その年の12月にはサラの体調が悪化し、左の肺が結核菌によって侵され、手術を余儀なくされた。メンケンがサラの病状が良くないときには、病院を訪ねて、彼女の体温表をつけたり、医者に病状を尋ねたり、元気づけるために病室にアルコールの小瓶を持っていったりした (Henley 11)。

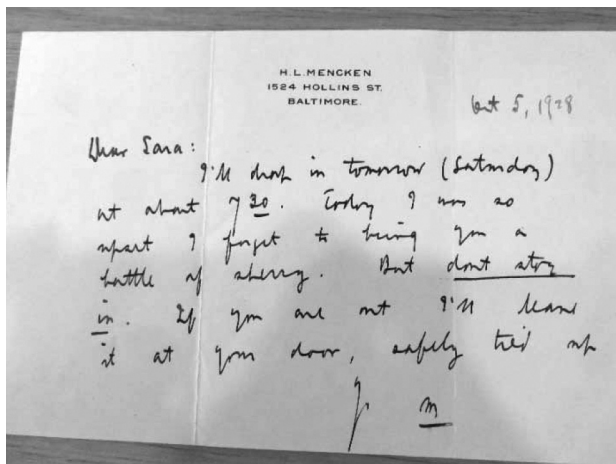


図2 メンケンからサラへの手紙

October 5, 1928

Dear Sara:

I'll drop in tomorrow (Saturday) at about 7:30. Today I was so upset. I forgot to bring you a bottle sherry. But don't stay in. If you are out I'll leave it at your door, safely tied up.

Yrs., M

(拙訳)

親愛なるサラへ

明日(土曜日)、7時半に寄ります。今日はとても動揺した。シェリー酒を持っていくのを忘れた。だが、待っていないでいいよ。もし君が外出していたら、ドアノブにしっかりとくくりつけておくから。

メンケンより

Rodgersによれば、この日、メンケンサラが嚢胞と虫垂炎で手術しなければならないことを知った。まだ二人は結婚前であるが、サラの体調を気遣う様子が垣間見える。しかし、その時期はメンケンが最も忙しい時期であり、講演旅行に行ったり、仕事上の人と会わなければいけなかった。そのような中でもメンケンはサラに手紙やプレゼントを送り続けたが、メンケンと女性たちのゴシップ記事が雑誌を賑わわせるに至り、サラはメンケンが訪ねて来た時に、嫉妬に駆られて会うことを拒絶したこともあった(Henley 11)。その後、1930年にメンケンはヨーロッパを訪れており、出発の時にはサラがニューヨークの波止場まで見送りに行き、友人に「とても寂しくなる」と告げている。その2、3か月後に2人はついに入籍した(Rodgers 421)。

メンケンはサラが作家になることを後押ししたが、サラが尊敬していたグラスゴーについては批判的な意見を書いている。例えば、1925年5月14日にサラに出した手紙を見ても。

Dear Sara:

…The Glasgow book seemed poor stuff to me<sup>3)</sup>. The old gal tried to write a novel about people she simply didn't know. In consequence, she had to fall back upon conventional melodrama-seductions, villains, etc. Compare her stuff to that of, say, Suckow. Sucknow knows her yokels, and can feel with them. To La Glasgow they are simply animals in cages.

(拙訳)

親愛なるサラ

…グラスゴーの本はつまらなく思えた。あの年配の女性は自分が知らない人について書こうとしている。結果として、彼女はありきたりなメロドラマに陥った。誘惑や悪漢など。それと比べて、例えばサッコウ。サッコウは田舎者をよく知っているし、気持ちを理解している。グラスゴーにとって彼らは、檻の中の動物にすぎない。

このように、メンケンがグラスゴーの代表作を辛辣に批判しており、これにたいしてサラは言い返すことができない。サラにとってメンケンは夫であり、師であることから、メンケンの意見には表立って逆らえなかった状況も、2人の書簡からすけて見える。

サラは夫に支えられて文筆活動を行っていたため、文壇にデビューするチャンスをつかむことができた。しかし同時に、夫の支援は作品に対する干渉ともなり、サラは大胆にイメージを変えるような作品を書くことができなかつた。優等生的な良き妻の役割から脱することができなかつたのである。独創性を重んじる作家にとっては、これは致命的ともいえる。夫の支援がこのように諸刃の剣であったことは、サラ自身が一番理解していたであろう。『南部の形見』はサラの死後、メンケンが出版したが、サラの美しいイメージと共に、異性愛の物語を軸として作者の精神の健全性、女性としての奥ゆかしさを証するものでもある。これらは、メンケンが妻に望む美德であったことを、この短編集は物語っているのである。

## 注

本稿は JSPS 科研費 17 K 02571 の助成を受けた成果の一部である。

- 1) エイハブ船長が白鯨捕獲に異常な執念を燃やすことは、新妻への異性愛の物語、つまり単なる恋愛小説と読むことができると舌津は指摘している (27)。同時に、従来のホモエロティックな作品解釈から、感傷的な異性愛の物語へと新たな解釈の可能性を提示しつつも、恋愛小説につきまとう「卑近」なイメージについて新たな議論の余地を提議している。
- 2) メンケンは公私にわたって反ユダヤ主義的な発言が見られることが指摘されている一方で、ヒトラーが支配するドイツからユダヤ人を逃れさせることに、時間や労力を惜しまなかつた。
- 3) 1925年に出版した『不毛の大地』。

## Works Cited

Haardt, Sara. *Southern Souvenirs: Selected Stories and Essays of Sara Haardt*.

Ed. by Ann Henley. Alabama: The U of Alabama P, 1999.

Marion Elizabeth Rodgers. *Mencken and Sara: A Life in Letters, The Private Correspondence of H. L. Mencken and Sara Haardt*. New York: McGraw-Hill Book Company, 1987.

舌津智之『抒情するアメリカ：モダニズム文学の明滅』研究者、2009年。

